ア・ルース・ボーイ

Saeki Kazumi
佐伯一麦

新潮社

ア・ルース・ボーイ

著者◉佐伯一麦（さえきかずみ）

© Kazumi Saeki 1991,
Printed in Japan

印刷　一九九一年六月一五日
発行　一九九一年六月二〇日
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)三二六六—五一一一
　　編集部(03)三二六六—五四一一
振替　東京四—八〇八
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-381401-2　C0093
価格はカバーに表示してあります。

ア・ルース・ボーイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

☆

ぼくは十七。いま、坂道の途中に立っている。

上杉幹（みき）と待ち合わせた喫茶店「クー」へ向かう外階段を見上げると、半ばあたりにロープが張られ、そこには〈本日休業〉の白いプレートがぶら下がっている。

ぼくは、チッ、と舌打ちをし、白いタイル貼りの同じ建物の一階にある化粧品店の中を覗いて、壁掛けの時計を見る。

約束の時刻の午前十一時まで五分足らず。

仕方がない、このままここで幹を待とう、とぼくは思う。

バスが二台かろうじて擦れ違うことができるほどの通りの両側に立ち並んでいる商店街の店々のアクリル看板やショーウィンドー、街灯の銀色のポール、アスファルトの路面、行き交う車のフロントガラス……。

目に映るさまざまのものが梅雨明けまぢかを知らせて、ようやく盛夏めいた七月半ばの陽

光をまぶしく照り返している。
ぼくは、今年になってからはまだ充分に身体に馴染んでいない熱気と光の横溢に目を細める。額に次々と吹き出す汗を幾度も腕で拭きなぐりながら、陽炎が立ってみえる緩やかな坂道の下方に視線を注ぎ続ける。
（あれは……？）
手持無沙汰な気分を紛らすために、煙草を吸いはじめるとまもなく、車にまじって自転車をこいで坂をのぼってくる男の姿が遠目に見え隠れしていることに、ぼくは気付く。
（……そうだ、やっぱりブラックだ！）
サドルから尻を浮かし、上体を折りたたむようにして頭を上下させながらしだいに近付いてくる男のさんざん見覚えのあるいでたち――この暑さにもかかわらず、灰色のスモックをはおっている――をみとめたとたん、反射的にぼくは、むせながら煙草を捨て、黒いバスケットシューズの底で慌てて踏みつける。
男は、狭い道路を隔ててぼくを見留め、一瞬、顔色を変える。が、すぐに目を逸らし、何も見なかったとでもいうような無表情を装い、通り過ぎて行ってしまう。
彼は、ほんの半月前までぼくが通学していたＩ高の英語教師だ。ここからだらだら坂を五百メートルばかり下り切ったところにＩ高はある。生徒指導部の部長でもある彼は、授業を

エスケープしてパチンコ店やゲームセンター、雀荘などに入りびたっている生徒達がいないかどうか、これから監視に向かうところなのだろう。「ブラック」という彼の仇名は、授業の空き時間には必ずといってよいほど、部室や校舎の屋上、便所などでの隠れた喫煙を取り締まるために、校内の隅々にいたるまで巡回してまわっていることから、ぶらつくその姿を彼自身の地黒な顔色に引っ掛けてこのぼくが命名してやったものだ。かくいうぼく自身も、去年の春、プールサイドの芝生に寝転んで日向ぼっこをしながらの一服がブラックに見つかって、一週間の停学処分を食っている。

まったく、相も変わらず、御苦労様なこった。

みるみる小さくなっていく灰色の後ろ姿に向かって、ぼくは毒づく。同時に、慌てて煙草を捨て、びくついたように身体をこわばらせ立ち竦んでいた、先刻までの自分に対して腹を立てる。

(あのまま、ぼくが煙草をくわえっぱなしでいても、ブラックの奴、もはや見咎めもしなかったにちがいない……)

思いがけず、怒りが一刷毛のもとに、淋しさにも似た感情に塗り替えられていくのをすんでのところで押し止めて、自分の方からI高を見放してやったんじゃないか、とぼくは改めて強く自分に言いきかせる。

「……ア・ルース・フィッシュ」

ブラックの姿が消えた坂の上をなおも睨み続けながら、ぼくは小さく声に出して言ってみる。

それは、ブラックが、ぼくの額に押した烙印だ。

三年生になってまもない頃の英作文の授業中、ブラックがまるで見せしめのように、ぼくの名前とその語句とを結びつけた例文を力まかせにチョークを折り折り黒板に大書し、それを男ばかりの同級生たちが失笑を洩らすでもなく、無表情にノートしていた――そんな教室のけしきが、ありありとまぶたの裏側に映る。

でも……、とぼくは思い直す。

あのとき、他の数学教師によって「お客さんの指定席」と皮肉られていた教室の窓際の一番後ろの席で屈辱感に耐えながら、そっと、〝loose〟という単語を辞書で引いてみた。すると、「しまりのない」「だらしのない」「道徳感のない」「不身持な」「ずさんな」……などといった否定的な意味ばかりの羅列の中に、意外にも、「自由な」とか「解き放たれた」というような意味も混じっていることにぼくは気付いた。ア・ルース・ホース＝放れ駒。ア・ルース・ドッグ＝鎖につながれていない犬……。

そのことを思い出すと、ぼくはにわかに、日本語ではなぜか〝ルーズ〟と濁って発音され

ているその言葉が、現在の自分にふさわしいように感じられてくる。
アイ・アム・ア・ルース・ボーイ。
そのネガティーヴな意味とポジティーヴな意味との岐路に、いま自分は佇っている、という思いに身が引き締まるのを覚える。
「錨をあげて出帆する」
辞書には確かそんな用例も載っていた、と思い及んだぼくは、昨日までのうっとうしい梅雨空から一転して高く澄み渡った青空を大海原に見立て、深呼吸する。
「お待たせ」
突然、背中で声がする。
弾かれたように振り向くと、いつのまにか幹が立っている。髪を無造作にポニーテールに束ね、あらわれている小さな耳から首筋にかけての肌の白さがまばゆい。少し息をはずませ、はにかんだような顔付でこっちをみつめる幹の、その両腕が手ぶらなのを見て、
「あれっ、赤ん坊はどうした？」
とぼくは訝る。
「アパートに置いてきちゃった」
こともなげに、幹はこたえる。

「置いてきたって……、大丈夫なのか？」
「平気よ、出て来る前にミルク飲ませて寝かしつけてきたもの。それから、おむつだってちゃんと取り替えてきたし」
依然心配顔でいるぼくをよそに、幹は自信の強い声で言う。そうして、「寝たのが十時だから……」
と独り言のようにつぶやくと、右手の指を折りながら、
「十一、十二、一、二、と。二時頃まではおとなしく眠っているはず」
と言い加える。「それより、どうしたの、こんなところにボーッと突っ立って」
ぼくは、階段に張られたロープの方に顎をしゃくってみせる。
「おかげで会いたくもないやつにバッタリ会っちまった」
「えっ、誰にあったの？」
顔を近寄せ、心配そうに幹がたずねる。出がけに身体も洗ってきたのか、シャンプーと石鹸のまじった甘い匂いを漂わせている。
「I高の先公さ。それも、よりにもよって、おれが殴っちまった奴」
吐き捨てるようにぼくがこたえると、幹はいたずらっぽい笑みを浮かべ、細い肩をすくめてみせる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「そっちは誰にも知っている人に会わなかったか？」
「うん、裏道とおってきたから大丈夫」
幹は明るい声でこたえる。
ここ一と月あまりのあいだ、人目を逃れて古い木造アパートの三畳の部屋に閉じこもっていた。そのときに比べて、幹の声音は、少し甲高く響いてきこえる。久し振りに浴びる外光に上気したように、額や頬のあたりをほんのり血の色に染めている初々しい表情。ぼくのジーンズを細いベルトでしぼってはき、白地に胸のところに赤のワンポイントが入っている、これもぼくのお下がりのTシャツを着ている服装を夏のセーラー服に着替えれば、普通の女子高生と何ら変わらない。
とても生後一ヵ月になる赤ん坊の母親だとは信じ難い思いに駆られて、ぼくはふと、自分たちが、高校の授業を脱け出してこれからデートを楽しもうとするカップルであるかのような気楽な想いに誘われかける。
「さて、と。赤ん坊が目を覚まさないうちに急ぐとするか」
気を持ち直して、ぼくは幹をうながす。
「あそこがそう？」
通りの向こう側に少し奥まって建っているくすんだコンクリートの建物に目を向け、幹が

たずねる。
それまでとは打って変わり、急に心細げな顔付になってみつめてくる幹に、ぼくは小さく頷き返す。
「こういうとこって苦手なんだよな」
下を向いて、幹がぽつりとつぶやく。
「とにかく、行くだけ行ってみよう」
自分の中にもあるためらいをはねのけるように強く言い放ち、ぼくは幹の手を取る。
しばらくして、吐息ともつかない頷く声とともに、幹の白くて細い指が、汗ばんでいる自分の掌をそっと握り返してくるのをぼくは感じる……。

十脚ほどの長椅子が置かれているそこには、疎らな人影がある。
土埃色の作業着を着た労務者風の男たち。ある者は、長椅子の上で寝そべり、またある者は、酔いうなだれたような格好で壁にだらしなく凭れかかり船を漕いでいる。濃い不精髭。
タブロイド判の競馬新聞を広げている人と、それをいじましく両脇から覗き込んでいる者たちがいる。
白い開襟シャツを着、パンチパーマの頭髪、薄黄色のサングラスをかけている男と、長椅

子の上に片膝を立てて乗っかっているジャージ穿きのせむしの小男が何やら話し込んでいる――。

透明なガラス張りの壁ごしに、外から職業安定所の一階のロビーの光景が覗き見える。

思わず、ぼくと幹は顔を見合わす。

「とにかく、行ってみよう」

とぼくはもう一度言う。だが、今度は掠れ声になってしまう。

入り口に回り、やけに重い扉を押して建物の中に入る。ロビーは、冷房が効きすぎていると思うほど、涼しい。いっぺんに汗がひき、半袖シャツから出ている腕の皮膚が粟立つ。鼻の奥にむず痒さが走る。

こらえきれずに、ぼくはくしゃみを一つする。また一つ。そして、もう一つ。

それらが、自分でも情けないほど弱々しく響いて聞こえる。

男達の無遠慮な値踏みの視線を浴び、自分たちがまるで闖入者であるかのように感じながら、とりあえず坐れる場所をぼくは探す。入り口の近くに、縦縞の濃紺の背広をきちんと着た短髪の中年男だけが一人坐っている長椅子を見付け、ほっとした思いでぼくと幹はその横に腰を下ろす。

「庁舎内において来所者に対する勧誘・直接募集等の行為は厳禁します　所長」

正面の壁に、筆文字の大きな貼り紙がしてある。
これから、いったいどうすればいいんだろう、とぼくは周りを見回す。
「おたくたち、仕事を探しにきたんだろう？」
隣の男が声をかけてくる。
「ええ」
とぼくは頷いたつもりだが、声は出ない。
「それならここじゃない。二階に行ってみな」
と、男は左手にある階段を顔で示して言う。
ぼくと幹は、男に向かって頭を下げ、立ち上がる。足をのばして眠っている男の地下足袋ばきの足先を踏み付けないように気を付けながら跨ぎ、階段の方へ歩く。
途中でぼくは、幹に向かって薄笑いを滲ませた淫猥な視線を投げ掛けている薄黄色のサングラスの男と目が会う。男は、首にコルセットを巻いている。
（ユー・アー・ア・ルース・フィッシュ！）
心の中で唾を吐き、ぼくは気合いを込めて男を睨み返す。
階段の上り口にあった案内板を見て、一階は失業保険の受給者や日雇い労働者の窓口があり、二階に一般の求職・求人の窓口があることをぼくは知る。

階段をのぼって二階に行くと、広いフロアー一杯に思いがけず多くの人の姿がある。「一般求人」「45歳以上の求人」「パートタイム求人」というようにコーナーが分かれているそこは、想像していたよりもよほど開放的な雰囲気で、ちょっと見には図書館の雑誌や新聞の閲覧コーナーに似通っている。けれども、求人のファイルに目を通している人々の表情は、おしなべて暗い。いやがおうにも、「失業者」という三文字が頭に浮かぶ。

「45歳以上の求人」のコーナーの長椅子に腰を下ろしている男たちは、皆が皆揃って暑苦しそうな背広姿だ。彼らは、薄っぺらなファイルの求人カードの一枚一枚を眉間に縦皺を刻んだ真剣な面持ちで隅から隅までゆっくりと目で追っている。

膝のうえに開いたままのファイルを置き、外した老眼鏡を持った手をその上に乗せ、疲労の濃い顔で口をへの字に結び目をつむっている男に、ぼくはふと親父の姿を重ね合わせる。だが、実直な一地方公務員である親父が、こんな場所にくるようなことはまず考えられない。あと二、三年で定年を迎えるはずだが、そのときは官公庁の外廓団体にでも再就職するのだろう。いわゆる天下りってやつだ。

ぼくは、カウンターの内側に目を向ける。事務机の前に坐り書類に目を走らせている職員たち。一番奥の皆を見渡せる位置に、上役らしい銀髪の男が大きめの机に坐っている。平の職員たちの椅子は肘なしだが、その男の椅子は肘付で背もたれも高い。

言ってみれば、親父はずっと、このカウンターの内側の人間であり続けるわけだ、とぼくは思う。そして、いま自分は、カウンターの外側の人間になることを選ぼうとしている……。

ぼくは幹をうながし、「一般求人」のファイルを手に取ってみる。いくつもの業種別に分けて綴じられ、棚に立てかけられているそれらは、「45歳以上の求人」のものに比べ、数段分厚い。

ぼくは、〈学歴不問〉〈見習可〉という条件で求人を募っている職業を探し出していく。

調理師。飲食店店員。警備員。飲食料品製造工。製版工。写植工。単純労働。販売店員。運転助手。自動車整備士。大工。仮枠大工。土工。雑役。左官。鳶。木工。石工。斫工(はつりこう)。金工。旋盤工。NCプログラマー。プレス工。鉄筋工。溶接工。塗装工。タイル工。配管工。電気工。機械工。紙器工。硝子工。組立工。鍛造技能工。土木作業員。ビル清掃員。造園作業員。ガソリンスタンド店員。営業員。防水工事作業員。構内作業員……。

それまで考えもつかなかった、多くの職業を目のあたりにして、ぼくは軽い興奮と大きな自由を覚える。若く健康な肉体を持った自分はこれらの何者にでもなることが可能だし、何をしてでも生きていける。この世には色々な職業があるという当たり前の事実を、I高にいた頃の自分はすっかり忘れていた、とぼくは痛切に思う。

ぼくは思い出す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.